

平成24年3月12日(月)実施 外部評価結果

研究部 ／センター	評価項目					評価者数	コメント	
	(I)各研究部／センターに関わる事項							
	平成23年度実績							平成24年度計画
	a. 計画の実施	b. 運営の方法	c. 目標の達成	d. 成果の発信	計(a～d)			e. 計画の妥当性
栄養疫学 研究部	4.50	4.13	4.63	4.50	4.44	4.00	8	<p>(I)各研究部／センターに関わる事項</p> <p>【平成23年度実績】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国の政策の基本となる研究が行われている。国民健康栄養調査公表の標準化の努力が表れている。 ・業務支援ツールの開発に努力がみられる。リンケージ研究による発信がすぐれている。摂取基準DB構築がすぐれている。 ・国民健康・栄養調査に関しては、調査協力が得られるよう一般の人達に向けての情報発信を行い、この調査をアピールしてはどうか。 ・食事摂取基準に関する幅広い活動は評価できる。次期策定時に日本人のデータによるエビデンスが構築できるよう期待する。 ・健康・栄養調査と食事摂取基準策定は、当研究所の最も重要なタスクとしますので、積極的に進めていただきたい。 ・国民健康・栄養調査についてまとめの短縮化に努力している。 ・震災に対応し食費摂取のための例を示している。 ・国民健康・栄養調査結果のとりまとめの迅速化に向けて、着実に進展している点や、食事摂取基準の活用についても諸外国と比較する等、優れた成果をあげている。 ・「国民健康・栄養調査」の実施は一大事業で集計期間の短縮(7ヶ月以内、1年後公表)について、この結果がWHO、OECD等、国際機関から求められる統計データとして活用されるようになったのは大きな進歩。 ・データの活用についてますます盛んになるように願います。 ・国民への説明等、十分な活動を行っている。 ・種々の活動を活発に行っている。特に災害時の基準活用は時宜を得ていて良い取り組みであろう。 <p>【平成24年度計画】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・定型業務と企画研究の両方から計画できている。 ・日本人の栄養状態の把握に必要な研究活動である。引き続きの成果を期待する。

◎各研究部／センターの評価項目

- a: 中期目標の達成に向けて調査研究・業務の方向性・実施は適切か。
- b: 中期目標の達成に向けて研究部／センターは適切に運営されているか。
- c: 中期目標の達成に向けて年度計画は着実に実施されているか。
- d: 調査研究・業務の成果は論文、学会発表等を通じて発表、あるいは情報発信、社会還元されているか。
- e: 中期目標の達成に向けて次年度計画は妥当適切か。

◎評価の基準

5:たいへん優れている 4:優れている 3:普通である 2:劣っている 1:非常に劣っている

平成24年3月12日(月)実施 外部評価結果

研究部 ／センター	評価項目					評価者数	コメント	
	(I)各研究部／センターに関わる事項							
	平成23年度実績							平成24年度計画
	a. 計画の実施	b. 運営の方法	c. 目標の達成	d. 成果の発信	計(a～d)			e. 計画の妥当性
健康増進 研究部	4.63	4.13	4.63	4.63	4.50	4.38	(I)各研究部／センターに関わる事項 【平成23年度実績】 ・がんと運動との関連について、データのどれ位リスクが下がるかを明示した方がよい。 ・エクササイズガイド2006改定の作業が精力的である(レビュー研究・メタ分析)。介入研究が計画通り進んでいる。検討会などの行政貢献が大きい。 ・エネルギー代謝研究が世界的レベルですぐれている。原著論文の実績が大きい。 ・運動基準に関する新しい知見がみられた。子供、幼児糖尿病などこれまで行われていなかった対象者での調査研究は評価できる。 ・身体活動・運動と独立した因子としてのSedentaryな生活についても、運動指針に加えていただきたい。 ・小児の運動指針については文科省のみに任せるのではなく、厚労省としても生活習慣病予防の観点から考えていただきたい。 ・関連学協会や健体財団との連携を進めていただきたい。 ・高齢者への対策に向け努力が見られる。 ・34本と非常に多くの原著論文を公表したことは高く評価できる。 ・65歳以上の解析、長い間求められていたもの。介護、認知症予防に効果有り。すべての人に相対目標、現実的に「メッツ」がわかりにくかったが、具体的な歩数、活動時間がわかるようになった。 ・ガイドライン改定のための継続的な対応がなされている。そのまともは興味深い成果になっている。 【平成24年度計画】 ・エクササイズガイド改定をすすめることがあてはまるものであると考えられる。 ・今後も幅広い対象者での調査研究、わかりやすい運動指針を期待する。 ・このまま、成果を出せる方向であればよい。	

◎各研究部／センターの評価項目

- a: 中期目標の達成に向けて調査研究・業務の方向性・実施は適切か。
- b: 中期目標の達成に向けて研究部／センターは適切に運営されているか。
- c: 中期目標の達成に向けて年度計画は着実に実施されているか。
- d: 調査研究・業務の成果は論文、学会発表等を通じて発表、あるいは情報発信、社会還元されているか。
- e: 中期目標の達成に向けて次年度計画は妥当適切か。

◎評価の基準

5:たいへん優れている 4:優れている 3:普通である 2:劣っている 1:非常に劣っている

平成24年3月12日(月)実施 外部評価結果

研究部 ／センター	評価項目					評価者数	コメント	
	(I)各研究部／センターに関わる事項							
	平成23年度実績							平成24年度計画
	a. 計画の実施	b. 運営の方法	c. 目標の達成	d. 成果の発信	計(a～d)			e. 計画の妥当性
臨床栄養 研究部	4.50	4.06	4.69	4.63	4.47	4.13	(I)各研究部／センターに関わる事項 【平成23年度実績】 ・今年度の成果は従来よりもヒトのデータが少なめと感じた。 ・公表された原著論文のインパクトファクターが高い。大学等との連携が密であることが想像される。部としての本年度の目標や達成の範囲を明確にしていただけとなお良かったと思う。研究レベル自体は極めて高い。研究所内の研究資金はさほど高くない。 ・遺伝子レベルでの多くの研究がなされ成果が認められる。 ・非常に優れた研究成果も出していると思われるが、当研究所の実施すべき研究かという疑問があります。 ・研究的成果は良く得られている。ヒトへの応用性が課題であろう。 ・極めて質の高い研究成果を発信していることは高く評価できる。 ・震災被災者健康・栄養調査研究プロジェクト、新規の2型DMの遺伝要因を同定できる可能性、離乳期の耐糖能異常の発生・分化と盛りだくさんの研究成果でした。 ・IRS-2のヒトでのデータ解析につなげてほしい。 ・生活習慣病発症に関する成果は面白い。人種による違いなどもクリアになると将来的には面白い。Tcf714でインスリン環境の違いをみる研究も面白い。 【平成24年度計画】 ・水準の高い今後の方向性が示されている。 ・モデル動物による研究をヒトを対象とした研究につなげてほしい。	

◎各研究部／センターの評価項目

- a: 中期目標の達成に向けて調査研究・業務の方向性・実施は適切か。
- b: 中期目標の達成に向けて研究部／センターは適切に運営されているか。
- c: 中期目標の達成に向けて年度計画は着実に実施されているか。
- d: 調査研究・業務の成果は論文、学会発表等を通じて発表、あるいは情報発信、社会還元されているか。
- e: 中期目標の達成に向けて次年度計画は妥当適切か。

◎評価の基準

5:たいへん優れている 4:優れている 3:普通である 2:劣っている 1:非常に劣っている

平成24年3月12日(月)実施 外部評価結果

研究部 ／センター	評価項目					評価者数	コメント	
	(I)各研究部／センターに関わる事項							
	平成23年度実績							平成24年度計画
	a. 計画の実施	b. 運営の方法	c. 目標の達成	d. 成果の発信	計(a～d)			e. 計画の妥当性
栄養教育 研究部	3.50	3.38	3.25	4.00	3.53	4.00	8	<p>(I)各研究部／センターに関わる事項</p> <p>【平成23年度実績】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食育研究室が1年休みだったので、24年度からの成果を望みたい。栄養指導研究室は、発表を丁寧にして下さい。説明がわかりにくかった。 ・部横断的に研究が行えている。運動基準・食事摂取基準策定のための寄与に意義が大きい。震災プロジェクトによる人員が活用できている。大学との連携が活発である。中期目標・中期計画としての成果発信が意識されている。(体制が整っていないため、栄養ケア・マネジメント室中心に評価した。) ・高齢者に関する大規模調査は研究所ならではの研究調査と思う。 ・有患者のエネルギー消費量は、対象者の選択は理解できたが、少し残念な対象であった。 ・遺伝子とアンケートの検討は新しい視点である。 ・遺伝子多型と食行動との関連を明らかにし対策等に役立て得る結果を得たのは大変興味深い。今後更に研究を発展させていきたい。 ・研究内容が身体活動も大きく含まれているので、部の名称を身体活動・栄養教育研究部と変更されたいかがか。 ・まとめ方が難しいように思われた。 ・研究目標に向けて、着実な達成が望まれる。 ・要介護者のケア、静岡、京都丸亀、これから続く調査研究、遺伝子多型の減量処方興味深い。 ・人員の異動で食育研究がストップしたのは残念でした。サポート体制があればと思いました。 ・運動基準等の特に介護者への対応をより明確に行うと面白いのでは。 ・食育研究に関しては成果なし。 ・食育指導に関しては計画と実施内容があまり一致していないが、うまくまとまる方向性はみえている。 ・グループの相互関係を上手く整理した方が良いかも。 <p>【平成24年度計画】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中期計画における目標と照らし合わせて、今後の課題が明確にできている(栄養ケア・マネジメント) ・今後も引き続き成果を期待する。 ・テラーメード予防法に関しては、より多くのエビデンスが必要では。

◎各研究部／センターの評価項目

- a: 中期目標の達成に向けて調査研究・業務の方向性・実施は適切か。
- b: 中期目標の達成に向けて研究部／センターは適切に運営されているか。
- c: 中期目標の達成に向けて年度計画は着実に実施されているか。
- d: 調査研究・業務の成果は論文、学会発表等を通じて発表、あるいは情報発信、社会還元されているか。
- e: 中期目標の達成に向けて次年度計画は妥当適切か。

◎評価の基準

5:たいへん優れている 4:優れている 3:普通である 2:劣っている 1:非常に劣っている

平成24年3月12日(月)実施 外部評価結果

研究部 ／センター	評価項目					評価者数	コメント	
	(I)各研究部／センターに関わる事項							
	平成23年度実績							平成24年度計画
	a. 計画の実施	b. 運営の方法	c. 目標の達成	d. 成果の発信	計(a～d)			e. 計画の妥当性
基礎栄養 研究部	4.13	3.75	4.38	4.38	4.16	4.38	8	(I)各研究部／センターに関わる事項 【平成23年度実績】 ・ddyマウスは興味深いのでヒトと同じように心筋梗塞などの発症へのリスクがどうか調査してほしい。 ・脂質代謝及び糖代謝を中心として研究が行われている。 ・今年度も多くの新しい知見が得られたことが分かる。中期計画から起こした年度計画が幅広くにとってあるため達成されているといえる。 ・脂質・糖質代謝の研究成果が多くみられ、評価できる。 ・高脂血症のモデルマウスの発見は大変意義深いし、興味深く思われる。BMI22以下という発言については、エビデンスはあるのか。 ・一応の成果は得られている。ヒトへの応用性を考慮する必要がある。 ・ddyマウスを見出す等、新たな発見は高く評価できる。より多くの原著論文の発表が期待される。 ・脂肪エネルギー比、低炭水化物、肥満は難治性の慢性疾患予防に大切。 ・LKB1-ONマウス、ddyマウスの結果を是非、成果を出して下さい。 ・運動時の脂肪燃焼のための薬剤開発で良い効果につながる研究を継続しているが、まだ、結論までには至っていない。引き続き行くと、面白い結果になりそう。 【平成24年度計画】 ・計画の呈示は明確である。 ・引き続き成果を期待する。

◎各研究部／センターの評価項目

- a: 中期目標の達成に向けて調査研究・業務の方向性・実施は適切か。
- b: 中期目標の達成に向けて研究部／センターは適切に運営されているか。
- c: 中期目標の達成に向けて年度計画は着実に実施されているか。
- d: 調査研究・業務の成果は論文、学会発表等を通じて発表、あるいは情報発信、社会還元されているか。
- e: 中期目標の達成に向けて次年度計画は妥当適切か。

◎評価の基準

5:たいへん優れている 4:優れている 3:普通である 2:劣っている 1:非常に劣っている

平成24年3月12日(月)実施 外部評価結果

研究部 ／センター	評価項目					評価者数	コメント	
	(I)各研究部／センターに関わる事項							
	平成23年度実績							平成24年度計画
	a. 計画の実施	b. 運営の方法	c. 目標の達成	d. 成果の発信	計(a～d)			e. 計画の妥当性
食品保健 機能研究部	4.38	4.13	4.31	4.63	4.36	4.25	8	(I)各研究部／センターに関わる事項 【平成23年度実績】 ・サーディンペプチドについて、医薬品(タナトリル)との併用的の血圧への影響はないとの報告であったが、他の降圧剤との併用効果についても今後検討してほしい。 ・法定業務に基づく計画が明確である。登録試験機関との、精度管理の取り組みが、研究段階から業務段階に進展していることが評価できる。分析の妥当性や食品の保健機能についての基礎的な研究成果が十分に得られている。社会貢献が明確。 ・分析手法や精度管理等、他施設にとっても重要な事であり成果が認められる。 ・健康食品素材の影響への研究は使用者が患者であることが多いことから、その成果をヒトへつなげてほしい。 ・精度管理は当研究所の仕事として大変重要なので、更に進めていただきたい。 ・β-カロテンの摂取基準を早急に定めていただきたい。 ・薬と健康食品の併用摂取の影響については、今後も必要な課題ではなからうか。 ・一般栄養成分分析用標準品の調製と配布、分析精度管理は、国が行うべき業務を独法が代わりに実施しており、高く評価できる。 ・食物繊維の分析法の確立等、実用化への道筋を作ってください。 ・十分な活動をしている。 【平成24年度計画】 ・中期計画に基づき、構造化された計画が作成できている。 ・引き続き成果を期待する。

◎各研究部／センターの評価項目

- a: 中期目標の達成に向けて調査研究・業務の方向性・実施は適切か。
- b: 中期目標の達成に向けて研究部／センターは適切に運営されているか。
- c: 中期目標の達成に向けて年度計画は着実に実施されているか。
- d: 調査研究・業務の成果は論文、学会発表等を通じて発表、あるいは情報発信、社会還元されているか。
- e: 中期目標の達成に向けて次年度計画は妥当適切か。

◎評価の基準

5:たいへん優れている 4:優れている 3:普通である 2:劣っている 1:非常に劣っている

平成24年3月12日(月)実施 外部評価結果

研究部 /センター	評価項目					評価者数	コメント	
	(I)各研究部/センターに関わる事項							
	平成23年度実績							平成24年度計画
	a. 計画の実施	b. 運営の方法	c. 目標の達成	d. 成果の発信	計(a~d)			e. 計画の妥当性
情報センター	4.63	4.25	4.63	4.75	4.56	4.25	8	(I)各研究部/センターに関わる事項 【平成23年度実績】 ・消費者向けの活動については高く評価したい。 ・行政的に意義の大きい業務内容となっている。発信業務は重要である。社会貢献が大きく、その状況が具体的に解説された。業務に関連する研究についても意欲的に取り組まれている。 ・限られたスタッフの中できめ細かい対応が行われている。 ・新しい方法等も入り、情報も幅広く取り出しやすくなった。 ・「健康食品」について世界の動向や国際的な基準との整合性をもって研究を行っていただきたい。 ・効率的に情報提供及び発信がなされている。 ・HPの維持・管理は着実に実施されている他、1日平均9000ページのアクセスがある点は高く評価できる。 ・常に新しい方法で情報公開するのは費用の面でも、人的手当でも大変です。 ・データベースの維持・管理等の業務は上手に行われているが、上手く公表した内容の宣伝も兼ねて利用度を上げるとよい。 【平成24年度計画】 ・従来通りの業務の継続には意義がある。 ・今後もさらに情報発信の場であることを期待する。

◎各研究部/センターの評価項目

- a: 中期目標の達成に向けて調査研究・業務の方向性・実施は適切か。
- b: 中期目標の達成に向けて研究部/センターは適切に運営されているか。
- c: 中期目標の達成に向けて年度計画は着実に実施されているか。
- d: 調査研究・業務の成果は論文、学会発表等を通じて発表、あるいは情報発信、社会還元されているか。
- e: 中期目標の達成に向けて次年度計画は妥当適切か。

◎評価の基準

5:たいへん優れている 4:優れている 3:普通である 2:劣っている 1:非常に劣っている

平成24年3月12日(月)実施 外部評価結果

研究部 ／センター	評価項目					評価者数	コメント	
	(I)各研究部／センターに関わる事項							
	平成23年度実績							平成24年度計画
	a. 計画の実施	b. 運営の方法	c. 目標の達成	d. 成果の発信	計(a～d)			e. 計画の妥当性
国際産学 連携センター	4.06	4.00	4.31	4.25	4.16	4.13	8	(I)各研究部／センターに関わる事項 【平成23年度実績】 ・国際連携に関する各種業務を着実にやっている。メタアナリシスも、社会還元のための重要な取り組みである。 ・NR制度の第3者機関へ移管についてフォローアップ研修など、要所をおさえた取り組みとなっている。 ・アジアを中心とした海外交流や情報発信等成果がみられる。 ・トクホの有効性、安全性に関して研究所としての成果がみられる。 ・WHOCを是非推進していただきたい。 ・対外的なルーチン業務として必要な課題に良く対応している。 ・中期計画に従い、着実な成果と実績をあげている。 ・国際交流等十分な成果を挙げている。産学官での成果としての特許が不明。 【平成24年度計画】 ・定型業務であるが、重要な業務が計画されている。 ・今後も引き続き成果を期待する。

◎各研究部／センターの評価項目

- a: 中期目標の達成に向けて調査研究・業務の方向性・実施は適切か。
 b: 中期目標の達成に向けて研究部／センターは適切に運営されているか。
 c: 中期目標の達成に向けて年度計画は着実に実施されているか。
 d: 調査研究・業務の成果は論文、学会発表等を通じて発表、あるいは情報発信、社会還元されているか。
 e: 中期目標の達成に向けて次年度計画は妥当適切か。

◎評価の基準

5:たいへん優れている 4:優れている 3:普通である 2:劣っている 1:非常に劣っている

平成24年3月12日(月)実施 外部評価結果
(Ⅱ) 研究所全般にわたる事項

評価項目	評価	評価者数	コメント
① 研究所の目的、理念に合致した運営がなされているか。	4.69	8	<ul style="list-style-type: none"> ・予算、人員が限られる条件下、独法の理念に合致した運営がなされ、大きな成果を挙げている。 ・独自性、公表性、透明性が担保された運営となっている。 ・部門によって多少の差はみられるが問題なく運営されている。 ・数年、この委員会に出席しておりますが、皆様の努力の結果がよくわかりました。 ・十分に運営がなされている。
② 効率的な組織・予算運営がなされているか。	4.31	8	<ul style="list-style-type: none"> ・優れた組織、予算運営がなされている。 ・予算が厳しい中、効率化への努力がなされている。 ・限られた人数・予算の中で成果は認められる。 ・年々予算を削られる中で、皆様のご努力で運営されていると思います。 ・ほぼ、成果を出すようになっている。
③ 研究成果は十分出ているか。 (学術論文、学会発表等)	4.56	8	<ul style="list-style-type: none"> ・研究員1人当たり2報を越える高い数値目標に対して、着実に対応できている点は高く評価できる。 ・原著論文の目標達成が著しい。 ・学会発表は計画に至らなかったが、十分と思う。 ・2本／人の論文作成、報告書等の作成はご苦労が多いと推察します。 ・十分に出ている。 ・論文数の要求度が高すぎないか。
④ 倫理規定、倫理委員会は適切に運用されているか。	4.19	8	<ul style="list-style-type: none"> ・適切である。 ・運用は円滑のように思われる。 ・問題なく運用されている。 ・今回、説明にはありませんでしたが。 ・よく見えない。 ・資料が少ないのでよく評価できない。年に何回会議を行い、委員名は公表されているのか、など。
⑤ 研究成果の社会還元は適切になされているか。(セミナーの開催、情報提供、知的財産の活用等)	4.56	8	<ul style="list-style-type: none"> ・HP、セミナー等、多様な形態での適切な情報が効率よく発信されている。 ・専門家向けセミナーを全国各地で行っていることに意義がある。 ・以前に比べ研究所の成果等が分かりやすく情報提供されていると思われる。 ・HPのデータベースの充実には驚きます。毎日更新も大変なことです。 ・セミナー、情報提供等、上手く行っている。
⑥ 他機関との連携や協力は適切になされているか。(受託・共同研究、連携大学院、国際協力、人材育成等)	4.19	8	<ul style="list-style-type: none"> ・国内ばかりでなく、海外機関との連携や協力が効率的に、また効果的に実行されている。 ・WHOのセンターとしての申請が2011年4月に始まったことが注目される。 ・他機関との連携や協力も成果が出ていると思う。 ・スタッフの数がどんどん減っている中、身分も様々な、そんな中で他機関との連携をするのは至難の業だと思います。ご苦労なことです。 ・他との連携は一部は見えるが、他はあまり見えない。
東日本大震災における研究所の取り組みに関わる事項(コメント)			<ul style="list-style-type: none"> ・短時間に体制を立ち上げ、充分な成果を挙げたと考えられる。 ・早急に取り組まれ良い成果を挙げている。 ・緊急時に適切な連携をとり、3/14に情報を発信する等、一早い初動は高く評価できる。 ・震災対応の研究が十分に実施されたと言える。被災者支援のための情報提供ツールが専門家向け、被災者向けに迅速に作成された。被災者調査に精力的にコミットできている。再現性という視点は重要である。災害時に留意すべき視点が生かされている。 ・早期から栄養士会や各研究所との連携をとり、リーフレット作成など間接的であるが、貢献できたと思う。また、今後につながる調査研究が行われ評価できる。当時、被災地から調査だけ行ったという声も聞かれていたので、目的等理解されるのは、なかなか困難な状況であった中での調査であったと思う。 ・早期に栄養士、管理栄養士を派遣できたことを評価します。ただ、栄養士養成教育課程の中に災害時、非常時の栄養学を学ぶ機会はなかったのではないかと思います。現場で役立つ栄養士を養成できるようなプログラム・セミナーの実施を希望します。 ・日頃の業務、研究、情報発信だけでも、追われる中、災害時の対応も担ってくださったことに感謝いたします。今後も国民の健康増進のためにご尽力ください。 ・時宜にあった対応と成果を出している。 ・突然の大災害であるにもかかわらず、震災に対する対応は良くなされていると思いました。
総合的なコメント			<ul style="list-style-type: none"> ・研究所全般に涉り、各部での研究成果が上がっていると考えられる。ただ、栄養教育研究部のプレゼンテーションで、成果が挙げられていないと推測されるような内容であった。地震後、担当の責任者が帰国したなどの事情があることが分かったが、こうしたことも含めてプレゼンテーションする方がよいと思われる。また、成果を発表する雑誌などへの発表数も少し多すぎる設定目標になっているので、それを割り引くと妥当な数といえよう。 ・各部、各室の人員が少ないにも拘わらず、国や消費者の要求に良く対応している。 ・限られた予算、人員の中で、120%の力を発揮しており、高く評価できる。 ・限られた人員と資金の中で最大限の成果が得られていると言える。研究者一人当たりにかかる負担が大きい懸念は続いている。定型業務に対してきちんと評価すると良い。 ・調査・研究が基礎研究から現場で使える人へとつながるテーマが多くみられた。研修会や情報発信も行われている。今後に期待される運営がなされている。 ・毎年感じるのですが、予算削減の一方で数値目標を立てて成果を挙げ、情報発信しておられることに頭が下がります。2年後に統合されるとのことですが、よい方向にまとまることを祈念しております。 ・全体的に見て上手く運営され成果が出ている。しかしながら、ルーチン部分と研究部分との分離と連携、さらにはそれをどのような方向性を持って行って、研究部分を世に活用していくかの方向性が見えにくい。 ・ルーチンワークの中で、多くの立派な研究業績を出されていると思いました。発表者の発表時間厳守をお願いします。

◎評価の基準

5:たいへん優れている 4:優れている 3:普通である 2:劣っている 2:非常に劣っている

独立行政法人国立健康・栄養研究所外部評価委員会委員名簿

平成23年4月現在

委員氏名	所属・職名
○五十嵐 脩	神奈川工科大学 栄養生命科学科 教授
伊藤 裕	慶應義塾大学 医学部 教授
逢坂 哲彌	早稲田大学理工学術院 ナノ理工学研究機構 機構長
加藤 則子	国立保健医療科学院 統括研究官
川島 由起子	聖マリアンナ医科大学病院 栄養部長
下光 輝一	東京医科大学 公衆衛生学講座 主任教授
豊田 正武	実践女子大学 生活科学部 教授
林 清	独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構 食品総合研究所 所長
三保谷 智子	女子栄養大学 出版部 香川昇三・綾記念展示室

・敬称略、五十音順 ○:委員長